

Title	共産主義の経済的基礎に就て(上)
Sub Title	
Author	伊藤, 秀一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.5 (1924. 5) ,p.738(118)- 754(134)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240501-0118

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

と共に交換を了し、茲に松坂銀札の流通も全く跡を絶つに至れり。

第五章 結 論

以上述ぶる所は松坂銀札の大體の沿革なれども、緒言にも述べたる如く、三井家の文書は未だ公開する運びに至らず、而かもこの論文の範圍も松坂銀札に關するものみに限れるものなるが、紀州藩と三井家との關係は單にこれのみに限られたるものにあらざるのみならず極めて密接なる關係あるものにして、詳細にこれを述べんとすれば自ら御用金、物産その他、講金、御藏米等のこと迄論述せざるべからず、かくては實際もなきことなれば當に銀札のことのみに限り、其他はこれを他日の研究に貽したり。只茲に一言注意すべきことはこの松坂銀札を若山札と混同して論せるもの多々とありしことなり。これ大なる誤謬にして殊に松坂銀札は普通の藩

札と異なり之れに對して爲替組なり、三井組なりが特別の方法を講じて遣り繰りせし等又五ヶ國共通融通を計る等、これを他の諸藩札と比較對照すれば大に趣を異にするものあり、而しての五ヶ國融通は松坂銀札として特筆すべき興味ある點なれば比較的詳説したる次第なり。

(大正十二年四月稿)

共產主義の經濟的基礎 に就て(上)

伊 藤 秀 一

Marx が一八五九年の著作「經濟學批判」(Zur Kritik der politischen Ökonomie)の序文に於て彼が研究の指南車 (Leitfaden) となれりと自稱

する所の唯物史觀の形式を掲げ、

「人類は彼等の生活の社會的生產に於て一定の、必然的の、彼等の意志より獨立したる關係、即ち彼等の物質的生產力の一定の發達階段に適應する生產關係に入り込む。此等生產關係の總和は社會の經濟的構造、即ち法制上及び政治上の上層建築の據つて以つて立ち、又一定の社會的意識形態が之に適應する所の眞實の基礎を形成するものである。物質的生活の生産方法は一般に社會的、政治的、及び精神的的生活過程を條件づける。」(Vorwort S. 55) と言ひ、更に又「一の社會組織は總ゆる生産力が其の組織内に於て餘地ある限りの發達を爲し遂ぐる以前に於て決して顛覆する事なく、且つより高度の新生產關係は其のもの、物質的存在條件が古き社會の胎内に於て孵化せられざる以前に於て、決して之れに取つて代る事がない。」(S. 56)と説明

せる一聯の句は普く熟知せらるゝ所である。而して此は實に Marx が社會進化考察の根基であつて、其の唯物史觀の公式は又直ちに資本主義的社會組織の批評乃至共產主義論の理論的根據をなすものであると言ふ事が出来る。

凡そ此の公式の説く所に從へば社會の眞の基礎は經濟組織にして、法律政治等は其の基礎の上に構成されたる上層建築に過ぎざるものである。而して或時代の經濟組織とは必ず其の時の生産力發達の程度に適應せる一定の生産關係の總和である。斯くて或時代の生産力の發達程度が其の時の生産關係、從つて經濟組織と調和する限りに於て換言せば其の經濟組織が生産力の發達のため好適の關係に在る限りに於て何等問題の生ずる事なきも、生産力漸く發達して生産關係との適合破れ、從來生産力の發達を助長し來りし社會組織が却て之が發達を妨害するの

繫縛となるに及んで社會革命の時期到來し、舊組織に代つて、その發達せる生産力に適應する所の新社會組織が出現するのである。併し一社會組織は總ての生産力が其中で充分の發達を遂げ次の社會の準備を全然完了した後でなければ決して崩壊する事なく、従つて新しき社會組織は其の物質的存在條件が舊社會の内部に於て具形せざる限り決して發現する事がないのである。

さて近世資本主義經濟組織の特徴は産業革命に其の因を發する大工業の著るしき發達である。而して Marx の叙上の理論に従へば、此の大工業組織の下に於ける生産力の發達の度合が今や其の生産力の資本主義的利用形態以上に成長し過ぎたのである。Engels の所言を以つてすれば、「有産階級の指揮の下に發育せる生産力は、蒸氣及び新なる機械が舊き製造業を大工業

に變革せる以來未曾有の速度を以つて未曾有の程度に迄發達した。併し乍ら嘗て製造業及び其の影響の下に次第に發達せる手工が、同業組合の封建的繫縛と確執するに至りしが如く、大工業も亦、其の充分なる發達の結果、資本主義的生產方法が自ら其の内に踞踏する所の限界と衝突するに至つた。新しき生産力は之れを利用する爲めの資本家的形態に對し既に成長し過ぎたのである。而して生産力と生産方法との間の此の矛盾は人間の頭腦の内に發生したる矛盾即ち人間の原罪と神の正義との間に於ける矛盾の如きものではなく、寧ろそは客觀的の、吾々の外界の、又之を招致せる其人自身の意志又は行動より獨立せる事實の内に存在する。」(Engels: Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. S. 287)

斯くて生産力と生産方法との矛盾確執は、必

然的に資本主義的社會組織の崩壊と社會主義革命の到來を導くものである。即ち所謂へらく

「斯くも偉大なる生産手段及び交通手段を魔法を以て喚起せる所の資本家的生産及び交通關係、資本家的所有關係、近世資本家的社會は、恰も彼自ら呪文を唱へて喚び寄せたる下界の力を最早や統御し能はざるに至れる魔術師の如きものである。過去數十年の間工業及商業の歴史は現代の生産關係に對する有産階級及彼等の支配の生活條件なる所有關係に對する現代の生産力の叛逆の歴史に他ならない。其の事は商業上の恐慌が其の週期的襲來に依つて全資本家社會の存在を脅威しつゝあるの事實を示せば足る。」

：社會の用に供せらる可き生産力は最早や資本家的所有關係の促進に役立たなくなり、寧ろ其反對に、生産力は此等の關係に對し餘りにも有力となり、却て此れが爲めに阻害せらるゝに至

つた。而して此等の生産力は其の障礙を排除する毎に資本家的社會の全體を無秩序に陥れ資本家的所有權の存在を危殆に瀕せしめる。資本家的諸關係は之れによつて生産せられたる富を包含する爲めには餘りに狹隘となつたのである。

…有産階級がそれを以つて封建制度を地に倒せる武器に今や有産階級其ものに對して向けられたのである。」(Das Kommunistische Manifest. Revolutions-Bibliothek. Nr. 3. S. 8) 更に「資本論」中有名なる左の一句は之れを要約して曰く「此の集中換言すれば少數資本家に依る多數資本家の收奪と提携して勞働行程の絶えず擴大する規模に於ける協業的形態科學の意識的な技術的應用、土地の計劃的利用、勞働要具の共同的にのみ使用し得る勞働要具への轉化、有らゆる生産機關をば結合的社會的勞働の生産機關として使用することに基く其節約、各國民が世

界市場の網に絡まる事、それと共に又資本制度の國際的性質等が發達して來る。斯る轉形行程の有らゆる利益を横奪獨占する大資本家の數が絶えず益々減少すると共に、窮乏や、奴隸状態や、壞類や、搾取などの量は益々増大して來るのである。が又それと共に、資本制生産行程自體の機構に依つて訓練、統合、組織さるゝ、絶えず増員しつゝある労働者階級の反抗が増進する。

資本獨占は之れと共にまた其もどに開花繁榮せる生産方法の桎梏となる。生産機關の集中と労働の社會化とは、其資本制的外殻と一致し難き點に到達する。資本制的外殻は破裂する、資本制的私有の吊鐘は鳴る。收奪者は收奪される。」と (Marx: Das Kapital. Hamburg. S. 728 高島氏譯文に據る、資本論 第一卷、第三册 四二二頁)

有産階級は常に自らを死に致す可き武器を鍛錬するのみならず其の武器を揮ふ可き人々即ち

して居るのである。就中 Marx が一八七五年五月七日附 Bracke に宛て、獨逸社會黨の Gotha 綱領を批評したる書簡中「資本主義的社會と共產主義的社會の間には一より他へ革命的變革の時期横はる。此の時期は之に適應せる一の政治的過渡期を含み其の過渡期の國家は革命的無産者獨裁以外の何物でもあり得ない。」(Marx: Zur Kritik des Gothaer Programms. Neue Zeit. B. IX, 1890/91 所載。Diehl u. Mombert, Ausgew. Lesestücke. Bd. XII. SS. 1545) の一句は隨時引用せられ深く Bolschewismus 理論の根柢となつて居るのである。併し乍ら Marx の體系に於て其の革命的獨裁の條條と其の社會進化學說とは決して矛盾撞着するものに非ずとは又等しく Bolschewismus の主張する要點である。何となれば凡そ Marxism 經濟學說の吾人に教ゆる所に依れば、假令革命的無産者獨裁の政治的形態を以

無産階級をも産み出したのである。(Das Kommunistische Manifest. S. 9) 今や收奪者を收奪するの任務は無産階級の歴史的使命である。時期至るや「無産階級は國權を掌握し生産手段を先づ國有に移し」(Engels: Herrn Eugen Dühring. SS. 301-2) 茲に資本主義的社會組織は其の終息を告ぐるのである。

二

以上は Marx の社會進化學說の基調の上に述べられたる資本主義的社會組織崩壊の徑路である。然るに他方 Marx の學說中資本主義的社會制度より共產主義的社會への推移は漸進的に行はるゝに非ずして、突如たる飛躍に依つて遂行さるゝとの論者を含むもの決して尠ならずとは屢々主張せらるゝ所であつて、殊に主として Bolschewismus に依つて高唱せられたる革命的無産者獨裁の理論は著るしく此等の點を敷衍強調

すと雖も一社會に於ける經濟上の必然的發展の過程、即ち例へば未だ物質的生産力が充分資本主義的に發達せざる國に於ては、斯の如き發達に向つての必然的過程を毫も左右し得るものではないからである。換言せば共產主義社會實現の根本條件たる經濟的發達にして尙不充分的りせば、無産者獨裁の實現のみにては未だ決して共產主義社會への第一步を印したるものではないのである。唯無産者の革命的獨裁下に於て斯の如き經濟的發達が著るしく促進せられ、社會主義的計畫がより容易に實行せられ、又其の下に於てのみ新社會實現に對する總ゆる障礙が完全に爰除せられ得るが故に、而して此等の任務を荷負ふ所の無産者獨裁自らが資本主義的國家より共產主義社會への過渡期に於ける必然的國家形態なるが故に主張せらるゝのである。然かも資本主義社會より共產主義社會への經濟

的發展の徑路は依然たるものとせらるゝ。Bolschewikiの領袖 Lenin が無産者獨裁の現状の下に尙且つ、「國家資本主義への進展」(“Evolution zum Staatskapitalismus”)の必要を力説し「物質的、經濟的關係に於て、又生産に關して、吾々は未だ社會主義の入口(“Tür”)にも達して居ない」と云ふ事、及び未だ達せざる入口を經由してなれば社會主義へ到達する事が出来ないこと云ふ事は極めて明瞭である。(Zur Naturalsteuereuen Politik und ihre Bedingungen. Die Kö-)と言へるが如きは言簡なれども、誠に這般の經緯を説明せるものと云ふ可きである。故に Mautner が其のボルシェビズム論に於て Marxism による社會發達の階段を四に分ち、近世資本主義的國家(第一階段)に次ぐ可き無産者獨裁國家(第二階段)は其の社會經濟的構造に於ては資本主義社會と社會主義社會の混淆にして、そは生産手段及生

産物が國家の手に移動するの時期なりとし、第三階段たる社會主義社會は即ち Marx が共產主義の第一階梯となす所にして茲に社會による生産手段の所有と生産の管理行はれ、尙分配は給付したる勞働量に従つて行はるゝといふ資本家的法則の殘滓を止む、然る後に共產主義の最高階梯即ち共產主義社會(「各人は其の能力に應じて各人に其の欲望に應じて」の共產主義的原則行はる)に到達すと解説して居るのである。(Mautner. Der Bolschewismus. S. 206)

資本主義社會より共產主義社會に至る經濟的推移に關する叙上の見解は夙に Lenin の名著「國家と革命」(Staat und Revolution)に於て覗はるゝ所である。何となれば其の一章「國家消滅の經濟的基礎」(Die wirtschaftlichen Grundlagen für das Absterben des Staat)を述ぶるに當つて、先づ「資本主義より共產主義への過渡」な

る項の下に再び無産者獨裁の意義を鮮明にし、順次共產主義の第一階梯、共產主義のより高き階梯へと項を分ちて論及せる其の意圖の存する所極めて明白であるからである。而して無産者獨裁の下に經濟的發達は如何に助長促進せらるゝかの問題は姑く後日の考察に譲り、然らば各共產主義の二階梯は如何に推移しゆく乎、其の階梯の下に人類の經濟的生活は如何に成りゆくであらう乎、私は以下 Lenin の導くがまゝに Marx の所説に遡り、更に前者の祖述する所に傾聽しつゝ、其の大略を覗はうと思ふのである。

三

凡そ Marx の社會進化學説を以つて資本主義的社會組織崩壞の徑路を説明し得るものとすれば、次いで來る可き共產主義社會の經過も亦右學説に従つてのみ究明し得らるゝの理である。

故に曰く、「Marx の全學説は近世資本主義に對する最も徹底的な最も完成せる最も熟慮に富める且つ最も内容豊富なる形式に於ける進化學説の適用である。従つて Marx にとつては此理論を資本主義の來る可き壞滅と共產主義の將來の發展との兩者に適用するの問題を生じたのは自然である。」(Lenin; Staat und Revolution S. 75) 然らば共產主義の將來の發展は如何なる事實の基礎の上に置かれ得る乎。「そは正に此の發展が資本主義の中に其の起源を持つて居るといふ事、歴史的に資本主義から發達するといふ事、資本主義が自ら産み出したる社會力の活動の結果であるといふ事である。Marx に於てはユートピアを捏造して知り能はざる事を徒らに推測する如き企ての片影もない。斯々の原因が存在し、而して斯々の方向に變化するといふ事を知つて居る場合に、かの博物學者が例へば新しき生物

の變種を取扱ふが如くに Marx は共產主義の問題を取扱つて居るのである。(ebenda SS 75-76) 先づ共產主義の第一階梯を考察し様う。

實に Lenin の指摘する如く (Lenin; a. a. O. S. 83 參照) Marx はその「ゴータ綱領批評文」に於て、労働者は社會主義の下に「労働の全產物」(unverkürzte Arbeitsertrag) を受取ると言へる Lassalle の見解を駁撃する。而して「労働の全產物を労働者に」と言ふが如き曖昧なる辭句を排して、社會主義的社會は經濟上如何に處理せらるゝやに就いての合理的分析を與へんとす。謂へらく「社會の全員」と言ひ「平等の權利」と云ふは單に文飾であるに過ぎない。其の眼目は共產主義社會に於て各労働者は Lassalle の所謂「労働の全產物」を受取るねばならないといふ點に存する。さて若しも此の「労働の產物」(Arbeitsertrag) なる語を Produkts der Arbeit

るしく制限され、新社會の發達の程度に伴ふて益減少するだらう。第二、或種の欲望に對する共同的充足に向けらるゝ部分、例へば學校、衛生設備等の費用、此の部分は固より今日の社會に於けるよりも著るしく大である。そして新社會の發達の程度に應じて増加する。第三、労働不能者等に對する基金、即ち今日の所謂貧民救助費に屬するもの。…今や始めて我々は、ラサール派の影響を受けた綱領が愚かにも唯之れのみを其の視野に置ける分配、即ち社會の個々の生産者の間に分配さるゝ所の消費物の部分に到達したのである。一私人の資格としての生産者から取去られたものが、假令、社會の一員たる資格としての彼に對して、直接又は間接に利益を與ふるとしても、「労働の全產物」は最早や明に其の「一部分」に變化した。「労働の全產物」なる語が消滅した様に又「労働の產物」なる語も

の意味にとるならば、組合労働の產物は社會的生產物の總量である。」此の生産物の總量から次のものが控除せらるゝ。「第一、費消されたる生産用具の補充部分。第二、生産擴張の爲に要する附加的部分。第三、諸種の災害、天災地變等に依る生産の混亂等に對する豫備積立金若くは保險積立金。…「労働全產物」の中から是等を控除する事は經濟的必須である。そして其の量は現存の生産用具と生産力に依つて、又一部分は蓋然性の測定に依つて決定する可きであつて、決して公正の觀念から計算せられないのである。」(Marx: Zur Kritik a. a. O. S. 142) 斯くて全產物中の他の殘部が消費の用に供せらる可きものとせらるゝ。「併し此れが個人間に分配せらるゝ以前に再び次のものが控除せらるゝのである。第一、生産に屬せざる一般行政費用、此の部分は固より今日の社會に比較して著

今や消滅する。(ebenda S. 143) 生産手段共有の上に打建てられたる組合社會の内部に於て生産者は彼等の生産物を交換しない。生産物の上に費されたる労働は茲では生産物の價值として、即ち其の生産物の有ゆる物的性質としては現はれない。何となれば資本主義社會と異なり、個人の労働は最早や間接に存在して居るのではなくて、直接に總労働總量の構成部分を形成するからである。今日ですら曖昧なる語義の故に批難せらるゝ「労働の產物」なる語は斯くて總ての意味を喪失するのである。Marx は語を繼いで云ふ。

「我々が茲に論題としつゝあるものは、自己獨特の基礎から發達したるものとしての共產主義社會ではなくて、其の反對に今、正に資本主義社會から生れるものとしての共產主義社會である。故に其の社會は經濟的、道德的、智識的

總ゆる點に於て、猶、其の胎内より生れ出でたる舊社會の母斑を止めて居る。従つて個々の生産者は——前記の控除の後——彼が社會に與へただけのものを正確に回収する。彼が社會に與へたるものは彼の個人的勞働量である。之を例示すれば社會の總勞働時間は個人的勞働時間の總計から成立つ。各生産者の個人的勞働時間とは社會の總勞働時間中彼によつて寄與せられたる部分、即ち總勞働時間に於ける彼の持分である。彼は(其の勞働の中から共同的積立金に對する分を控除せられたる後)斯々の勞働を寄與したといふ證書を社會から受取り、彼は其の證書を以て、消費物の共同倉庫から同量の勞働に匹敵するだけのものを引出すのである。即ち彼は一の形に於て社會に與へたる勞働の同量を、他の形に於て回収する。(ebenda. S. 144)それは正に外觀上平等の支配する社會である。「併し

乍ら若しも Lassalle が斯の如き社會秩序(一般に社會主義と稱ばれ Marx によつて共產主義の第一階梯と名付けられたるもの)を目標とし、此れを以つて正當なる分配即ち「勞働産物の等量に對する平等の權利」を意味するものであると言ふならば、明に彼の誤謬である。而して Marx は此の誤謬を解明して居るのである。」と。(Lenin: a. a. O. S. 48)

四

Marx は言ふ前記共產主義の第一階梯に於ては、それが等價の交換である限りに於て、明かに商品交換を統制すると同一の原則が行はれて居る。成る程内容と形式は變化して居る。何となれば變化せる事情の下に於て、何人も自己の勞働以外の何物も與へる事が出來ず、又他方に於て個々の消費物以外の何物も個人の所有となり得ないからである。併し、個々の消費物が個

々の消費者の間に分配さるゝ範圍内に於て、等價商品の交換に於けると同一の原則が行はるゝのである。既に述べたるが如く茲では、一形式に於ける同量の勞働は他の形式に於ける同量の勞働と交換せられる。「故に平等の權利(即ちブルジョアの權利)は猶ほ原則となつて居る。唯其處では、原則と實際とは最早や相互に確執する事なく、同時に又、商品交換に於ける等價の交換は個別的に存在せずして、平均的にのみ行はれる。されど、此の進歩にも拘らず、平等の權利なる者は未だブルジョアの限界を脱しない。生産者の權利は彼の勞働給付に比例する。平等は平等の尺度即ち勞働で測定されるといふ點に存する。」(Marx: a. a. O. SS. 144-145)

斯くて平等の權利は總ゆる權利と同様に、不平等を豫想するものである。總ゆる權利の意味する所は實際上同質でもなく、同等でもない異

つた人々に、同一の準繩を適用するといふ事である。故に平等の權利なるものは、實は平等の侵犯であり、且つ不正である。即ち曰く、「或者は肉體的にも精神的にも他の者より優越して居る。其れ故同時間内により多く働く事が出來、或はより長い時間中働く事が出來る。然るに勞働を以て尺度となす爲めには、其の延長と強度に依つて決定せられなければならない。然らざれば尺度として役立つ。故に平等の權利とは實は不平等なる勞働に對する不平等なる權利である。茲では總ての者が勞働者であるから、階級の差別は存在しないが、自然的特權としての不平等なる個人的天稟従つて又不平等なる實行能力が暗黙裡に承認されて居る。故に平等の權利は其の内容から云へば總ゆる權利と同様、一の不平等なる權利である。凡そ權利なるものは其の本質上、同一の尺度の適用に於てのみ存在す

る。然るに不平等なる個人は(同一人に非ざる限り)不平等であるから)同一の視點の下に置かれる時、即ち或一定の方面から觀察する、限りに於てのみ平等の尺度で測定せられ得るに過ぎない。例へば此の場合總ての人は労働者としてのみ認められ其の他の事は一切無視される。更に又、或る労働者は結婚し他の者は未婚である。或者は他の者よりも多くの子供を持つて居る。其他色々の事情が存在する。故に平等なる労働給付と云ふも、又其れに準じて消費物の社會的貯藏からの平等の分前と云ふも、實際上に於ては、或者は他の者より多く受取り、或者は他の者よりも富裕であるといふ様な事が生じる。總て此等の不都合を避けんが爲めに、權利は平等であつてはならない。其は不平等でなければならぬ。」(ebenda. S. 145)

各人が社會的生産に提供したる労働量に比例

はざるものである。換言せば生産手段が全社會の共有に移つたといふ事だけでは生産物が其の給付されたる労働量に應じて分配さるゝ限りに於て存在する所の分配上の缺陷とブルジョアの權利の不平等は未だ排除せられないのである。

「併し此の不都合は、共產主義社會の第一階梯即ち資本主義社會から長き分婉の苦痛の後に生れ出たる此の階梯に於ては不可避である。權利なるものは其の社會の經濟狀態及び其れに依つて條件づけられたる社會の文化發達よりより高く登る事は出来ない。」(ebenda. S. 145)

故にLeninは之を説明して謂へらく「共產主義社會の第一階梯ではブルジョアの權利が完全に廢せられて終ふのではなくて、既に達せられたる經濟的變革に應じて、即ち生産手段に關してのみ、廢止せらるゝのである。ブルジョアの權利は生産手段を各人の私有として認容する。社

して、其の必要とする消費財の分配を受くるといふ制度の存する限り、尙、不平等と不正は免れ難しとはMarxの確信する所である。故に共產主義の第一階梯は未だ正義と平等を實現する事能はずして、富裕の相違、及不公正なる相違が依然として存するのである。唯此の階梯に於ては、生産用具即ち工場、機械、土地等を私有財産として所有し能はざるが故に、一人が他の者を搾取すると云ふ事が不可能になる。Marxは徹頭徹尾此の主旨に準據して、平等と正義に關するLasalleの韜晦的言説を峻拒し、先づ私人が生産用具を所有するの不正を排除するの餘儀なきに至れる共產主義社會發達の徑路を茲に指示して居るのである。然るに其の欲望に應せず、給付されたる労働量に應じて消費財を分配するの一事に横はる所の、より大なる不正は共產主義社會を以つてして直ちに之れを廢止し能

會主義は其等を共有に變へる。唯、其の範圍に於てのみブルジョアの權利は廢さるゝ。然るに社會各員の間に労働を分割し、且つ生産物を分配する所の統制者として、猶、此の權利は殘留する。「労働せざる者は食する能はず」此の社會主義的原則は既に實現せられる。「同量の労働給付に對して社會的生産物の同量を」此の社會主義的原則も亦既に實現せられる。それにも拘らずこは未だ共產主義ではない。此は、實際上不平等に労働給付に對し、同等でない各人に同量の消費財を分つ所のブルジョアの權利を廢止しない。Marxは言つて居る、此れは一の缺陷であるが併し共產主義の第一階梯に於ては不可避である。何となれば若しも我々がユートピアに住んで居るのでなければ、人々が資本主義の崩壊と共に直ちに何等法律的統制なくして社會の爲めに労働す可きの理を悟るだらうとは

信せられない。實に資本主義の廢止は直ちに斯の如き變化に對する經濟的基礎を準備しては居らないのである。」(Lenin: a. a. O. S. 85-86)

五

共産主義の第一階梯は猶多くの點に於て資本主義的社會の殘滓を留むる。生産手段の共有實現せらるゝと雖も分配上に於ける資本主義的法則——一種の賃銀制度は依然として存在する。

其處には經濟的生活に對する法律的統制行はれ従つて國家の存在を必要とする。此は實に謂ふ所の社會主義的社會である。故に「社會主義と共産主義の科學的相違は明瞭である、一般に社會主義と呼ばれて居るものが Marx の以て共産社會の第一階梯若くはより低き階梯と名付くるものである。…… Marx の此の説明の重大なる意義は、彼が茲でも亦一貫して其の唯物論的辨證法即ち進化學說を適用して居ると言ふ事であ

る。」(Lenin: a. a. O. S. 89)と述べ更に進んで「此の第一階梯に於て共産主義は未だ經濟的に充分成熟しては居らない。そして資本主義の傳統及び痕跡を全然免るゝ事が出来ない。故に我々は茲に「狹隘なるブルジョアの權利思想」を保留する所の共産主義の第一階梯の興味ある現象を見る。消費財の分配に關するブルジョアの權利は必然的に資本家の國家を豫想する。凡そ權利なるものは法律的規範の遵守を強制する所の機關なくしては何等の意義がないからである。従つて或一定時に於て、單にブルジョアの權利のみならず資本家の國家すらも、資本家階級なき共産主義の下に残存し得る。」(ebenda S. 90)と斷ずる所以である。

さて、斯の如き經濟組織の下に於て、總ゆる人民は武装的労働者に依つて形成せらるゝ國家の被雇傭者に變じる。總ゆる人民は、全國民の國

家的企業合同 (Statsyndikats) に於ける被雇傭者及労働者となる。其處では單に總ての者が平等の労働を給付し、労働の日課を正しく遵守し、而して平等の賃銀を受取るといふ事のみが問題である。然るに Marx の共産主義は決して茲に止まる可きものではない。即ち曰く「全社會は平等の労働と平等の賃銀を持つ一の官衙一の工場となるであらうが、併し、無産階級が資本主義の倒壞及び搾取者の排除に依つて全社會に擴張する所の此の工場紀律は決して我々の理想でもなく我々の窮極目的でもない。其れは資本主義的搾取の卑劣と低劣を急激に一掃せんが爲めの、而してより遙かなる前進の爲めに必要なる階段に過ぎないのである。」(ebenda S. 92-93)

斯の如く共産主義の第一階梯は Marx 「従へば社會的進化の必然的階段なるも、此の階梯の

下に速かに進出する所の社會的經濟的發展の經過に伴ひ、今や一切の障礙が廢除せられ、一切の強制手段が死滅するに及んで茲に自ら、より高き共産主義社會が實現するに至るものである。即ち Bolshevismus の一領袖 Bucharin の言を以てせば總ゆる強制の廢除せられたる状態の下に於て「國家的分配に依つてはなくなり、經濟的合宜の原則に依つて分配さるゝ生産力は未曾有の速度を以て發展する。嘗ては階級闘争、戦争、軍國主義、恐慌の芟除、競争等の爲めに浪費せられたるエネルギーの蓄積は今や生産的労働に轉用される。階級の解體、労働教育、新時代の教養、全生産過程の合理化は生産力の増大を益促進する。分配は「給付に應じて」といふ強制的報償分配の性質を失ふ。無産者獨裁及び此れに續いて來る時期の社會主義は共産主義的社會制度へと發達してゆくのである。」(Bucharin:

Oekonomik der Transformation Spetode. S. 196)

英國穀物市場の史的考察(三)

高木 壽 一

五

價格の點より見れば、市場は或る貨物の價格が容易迅速に均等ならんとする強き傾向を有する或る地域を總稱する。從て他の市場地域に對して一の差別的價格を持つ。此一の差別的價格に向ふ強き傾向の存せる地方的穀物市場は、穀物取引が多數となり組織的となりたる時に始めて發生したのである、此地方的穀物市場に於ける穀物價格に關する統計的資料も此地方的市場地域が既に存在するに到れる、第十三世紀以後より現はれる、而して此時代より以後の穀物價

格を見る場合に於て、専ら小麥のみによる。蓋し一には、小麥價格に關する資料が他の種の穀物に比して遙かに豊富なるがためと、又一には小麥が日常消費の主要穀物であつたからである。第十二世紀中葉より、第十四世紀末に到る頃の時代に於て(即ち Plantagenets の時代に於て)英國民は粗悪、下等の穀物を常食としたりと一般に信せられんとして居る。而も實に之に反して、英國の大部分に亘り、北はデアハム(Durham)の州に到るまでも農業の主要生産物、又即ち人民の主要食糧は小麥であつた。但し、其の北部地方に於て之と共に燕麥も食料として消費されて居た。最も古き時代より小麥は英國民が常食としたる主要穀物であつたのである。是が最良の證左としては、諸々の所領地に於ける諸種の穀物に費さるる耕地面積の大小如何に若くものはない。最も廣き面積を有せる作物

が主要産物であり、又最も廣き市場を有せることは明である。例令、一三三三——六年の四年間、オックスフォードの Merton College は其所領地の十一箇所を其自らの資本にて耕作した。其所領地十一所の中、三箇所は Surrey に、一は Kent に、二は Cambridgeshire に、Bucks, Warwickshire 及 Hants に各一。Oxfordshire には二箇所の所領地があつた。其穀物耕作せられたるもの、第一年には一二〇六エーカー。第二年には一二二五・五エーカー。第三年には一四五七エーカー。第四年には一四四〇四分ノ一エーカー。にして、其中小麥を蒔かれたるは、第一年に五二七エーカー、第二年に四六〇エーカー、第三年には、五六〇・五エーカー。第四年には五一〇四分ノ一エーカーであつた。即ち其面積の比率より見れば各年略々四四%三五%、三九%、三五・五%等である。耕作面積に於て小麥に次ぐ作物は燕麥なれ

ども、南部英國の住民の食糧となること極めて僅少にして主として馬糧として用ひられた。大麥も燕麥を同じく凡そ三百エーカー内外に作られたれども、其用途は其種類によりて麥酒製造用として、又一部は豚、家禽類の飼料として使用された。其他には裸麥あれども其耕作面積は五十エーカー内外にして他の穀物に比して極めて微々たるものであつた。之等によつても、食糧としての小麥の生産が農事耕作の主要部分なりしことを知ることが出来る。中世英國の住民は小麥製(或は他の穀物と混ぜて)のパンと、大麥より作れる麥酒によつて生活して居た。即ち小麥價格の高低は主要なる農業的利害を形成したのである。斯くの如き事情に加ふるに小麥價格に關する資料のみが最も豊富なることは、吾人をして之のみを以て以下の敘述の基礎とならしむるに充分である(Rogers: *Wolk and Wages*,